

# 段ボール箱になった男

淡波亮作

この物語はフィクションであり、あらゆるロケーション、登場する人物やキャラクターはすべて架空のものです——が、もしも何か思い当たるフシのあることが見つかったとしたら、それはきつと、あなたの世界では現実の出来事なのでしょう。

——きつと、ね。

気が付いていなかったただけなのか、本当に突然そいつが姿を現したのか定かではない。黒い雲のたちこめる会社帰りのこと、長い直線が続く見通しの良い遊歩道の向こう側から男は歩いてきた。大きな段ボール箱に小さな段ボール箱を重ねて、体の前に抱えている。特に理由は見当たらないが、小さな恐怖心が芽生えた。不審者、という言葉が脳裏をかすめる。すれ違いざま、上に乗せた箱の横から男の顔が見えた。覗き込むつもりはなかったが、突然目の前に姿を現したように感じたからか、自分が何を怖がっているのか確かめたかったのか、私はつい男の顔をじつと見てしまった。男がこちらを睨み、私はたまたま顔を動かす途中だったように視線を外す。ここで急に顔を背けたら負けだ、見ていたことが知れてしまう。これではどちらが不審者か、わかっただけではない。そう思いながら、私は遠ざかる男の気配を背中で気にしていた。

ばざり。突然視界が真っ暗になった。肩に何かが乗った。重くはない。

この音、この肌触り……段ボール箱か？ 男が持っていた、箱？ 男は、私から遠ざかっていたのではなかったか。確かに、遠ざかっていたのではなかったか。

「お前さんには当分不要だから、もらつとくぜ」

あいつだ。あの顔から発せられた声に違いなかつた。すれ違いざまに走り出さなかつたことを、少し後悔していた。私は動転していたが、男の言葉に答えないわけにはいかなかった。

「え、何を」

そこまで言つて、私は黙り込んだ。頭に被さつた段ボール箱の中で響いたのは私の声とはほど遠い、ヘリウムガスを吸つたような高音のダミ声だつたのだ。こんなおかしな声を発せられても、男は気に留める様子もないように落ち着き払つていた。

「安心しな、カバンと財布はちゃんと警察に届けとくから、頂戴するのは現金だけだ」

金を盗られて安心しろと言われて安心する男がいるはずもない。単なる泥棒じゃないか。人に段ボール箱を被せて持ち物を盗ろうだなんて、どれだけふざけた手口なのだ。男はやけに楽しそうに、鼻歌交じりに続けた。

「さてと、久し振りになんか食いに行くかー！ コーンビニー、コーンビニー、ヤツホヤツホー！」

何がヤツホヤツホーだ。

「待つてよー！」

待つて！と言つたつもりだったが、どうにも間抜けな物言いになつてしまつた。しかも、また変な声だ。しかしいずれにしても、まずは段ボール箱から抜け出さねばなるまい。私は肩にぐいと力を込め、右手を上げようとする。箱の中でつかえてしまい、自由がきかない。左手で箱の下をまさぐろうとするが、端までは手が届かない。そんなに大きな箱だつたのだろうかと思つたが、何しろ膝まですつぽりと覆われていて、どうにもならない。

男が走り去つて行く音が闇夜に響く。逃げる。逃げる。逃げてしまふ。闇夜に？街灯はあつたはずだが、足下まで妙に暗い。急に不安が募る。怖ろしくなる。私はただ、その場に固まつていることしかできない。

しゃがみ込めばいいかもしれないと思ひ付き、膝を曲げて腰を下げる。がざりと音がして、段ボール箱の端が地面に着いたのがわかる。だが、小箱に張り付いたようになつた頭は下側に抜くこともできない。箱の天面は肩に乗つかつていただけのはずだが、肩と天面も貼り付いたようになつていて隙間が空くことすらない。いつたいどうなつてしまつたのだ。強力な接着剤でも内側に塗りまくられているのだろうか。肩

を、頭を、前後左右に振る。だがまるで私自身の身体のように、段ボール箱は身体の動きに同期して揺れるだけだ。落ち着いて考えようと思うのだが、これで落ち着いていられるわけがない。どのみちもう、男はどこかへ行つてしまった。追いかけて捕まえることはできないだろう。あまりにも自由に動かない身体に、イライラしていた。有り金すべてを盗まれてしまつて何もできなかった自分自身に、イライラしていた。途轍もなくイライラしていた。今日は朝からロクなことがなかつた。妻に吐かれた棘のある言葉や、上司に投げられた他人を蔑むような表情、それに客先での些細な悶着を思い出し、嫌な気持ち体がじゆうで暴れていた。いずれも、どちらかといえば自分が悪かつたことはわかつていた。だがそれは、意識の隅に追いやつた。私は悪くない。被害者なのだ。そして……あのおかしな男に盗られた金、それから何にも増してこの忌々しい段ボール箱め！ 私は両手でいきなり万歳をするように、そんな気持ちで爆発させるように、私を包む段ボール箱を上に向かつて力任せに殴りつけた。普通なら、段ボール箱ごときそれで吹っ飛ばはずだろうし、少なくとも頭がはまつている小さい方の箱くらいは外れて然るべきだろう。だが、今度は鈍いポコリという音がしただけで、段ボール箱は私を離してくれそうにはない。

(続きは電子書籍で！)